

英米型資本主義の興隆とその将来⑨

法政大学 経済学部教授 (客員) 渡部 亮

米英企業は、規制緩和やグローバル化の潮流の中で、株式市場を舞台として革新と統合を進めてきた。そのことが、今日の英米型資本主義興隆の原動力となっている。その米英企業のグローバル経営において、制度インフラとなっているのが、英米法（コモンロー）、擬似貨幣として株式、そしてコミュニケーション手段としての英語である。

米英をはじめとしてオーストラリア、ニュージーランド、カナダなど、英語を母国語とする国々（English speaking countries）が皆一様に活性化した結果、国際言語としての英語の役割がいっそう高まった。

1. グローバル企業経営における英語の役割

言語は、法、貨幣と並ぶ人間社会の基本要因であり、「おしゃべりは無料」という意味で、典型的な公共財でもある。芸術家は、色や音を使って自己主張するが、ビジネスに携わる人間は、言葉や文字を使って論理を構築したり自己主張したりする。

会社の経営者が株主にたいして行うインベスターリレーションズ（IR）、従業員にたいして行う人事考課、さらには進出先の現地住民との対話など、言語によるプレゼンテーションやコミュニケーションが決定的に重要な役割を担う。ビジネスの世界では、人種、性別、年齢、出自の違いにかかわらず、各人が言語による意思表示を行い、言語によって議論を戦わせる。

それでは数多い言語の中で、なぜ英語が重要なのかというと、英語を母国語とする米英企業が国際ビジネスの世界で躍進しているからである。英語の使用を義務付けた国際協定が存在するわけではない。国連憲章 21 条は、国連における使用言語などの手続規則を定めているが、英

語だけが使用言語となっているわけではない。英語のほかにも仏語、中国語、スペイン語、アラビア語、ロシア語が国連では使用される。しかし、英語の使用頻度が圧倒的に高い。欧州連合（EU）の国際会議などで、加盟国間の同時通訳、例えばスロベニア語からリトアニア語への同時通訳などは、一度スロベニア語を英語に訳し、その直後に英語からリトアニア語に訳すという。これも別に誰がそうしろと決めたわけではなく、自然に英語を介した通訳経路を通るようになったものであろう。そうした意味で、英語は、ドルやコモンローと同様、デファクトスタンダードの典型である。

2. ラテン語の影響を受けた難解な言語

英語は、6 世紀頃からさまざまな外国語を採り入れることによって進化を遂げてきた。その単語数の多さは、世界の主要言語の中でも群を抜くものがある。『研究社新英和大辞典』によれば、英語は「言語的消化不良の慢性症」に陥っているという。実際に、基本英単語 2 万語のうち、ラテン語源の単語が 15%、ギリシャ語源が 13%、フランス語源 36% で、この三者を合計すると、全体の 64% を占める。なかでもラテン語の影響が大きい。アングロサクソン本来のゲルマン系語源の単語は、2 万語のうちの 19% に過ぎない。

ラテン語は、ローマ近郊のラツィオに住む人々が使っていた言語である。19 世紀後半の高名なドイツ法学者ルドルフ・フォン・イェーリングは、『ローマ法の精神』という古い書物の中で、概要次のようなことを述べている。「ローマは三度世界に掟（おきて）を命じ、三度諸民族を統一体に結合した。一度目は武器によって、二度目はローマカトリック教会によって、三度目はローマ法によって結合した」。

英国はローマ法を継受しなかったから、二回しか征服されていないというのが通説だが、英語がラテン語の影響を受けているという意味では、やはり三回征服されたことになる。

日常生活で頻繁に使われる I, you, it のような代名詞、one, two, three のような数詞、at, on, in のような前置詞、eat とか die とか動作を示す動詞、さらには dog とか stone のような具象物、農耕・牧畜・航海・漁業関係の単語には、圧倒的にアングロサクソン系ないしゲルマン系語源の単語が多い。しかし、経済や政治の世界で使われる抽象的な概念になると、ラテン語源やギリシャ語源の単語が途端に多くなる。これは、ノルマン人が 11 世紀にアングロサクソン王国を征服して出来たという英国史によるものである。

ノルマン人とは、北部フランス人 (north man = 北の人) というような意味であり、簡単にいえば、フランス人が英国を征服した。征服後の数世代の間、イングランド中のすべての重要な地位は、フランス語を話すノルマン人によって占められ、英語 (ゲルマン系言語) は下層階級の言葉とされた。フランス語は、ラテン語に源流を發するフラマン語系言語だから、ノルマン人の征服は、英国にラテン語を持ち込むことになったのである。

ちなみの経済学者ケインズの祖先も、征服王ウィリアムの家臣としてイングランドに渡ったという。そのため Keynes という姓名の発音が、通常なら「キーンズ」というべきところを「ケインズ」といった異例の呼び方になっている。

こうした歴史的経緯が存在するため、一つの事物や事象を表すのに、英語には、ゲルマン系単語とラテン系単語の二つが存在する場合が非常に多い。例えば「美しい」には pretty と beautiful が、「短い」には short と brief が、「建てる」には build と construct が、「最後」には last と final が、「負かす」には beat と defeat がある。いずれも前者がゲルマン系、後者がラテン系である。

3. 米国英語によって簡素化

英語は、語彙が非常に多く煩雑な言語であるが、それでも米国英語の發達によって相当に平

易化された。この平易化には、1806 年に米国で最初の米語辞典を編纂したノア・ウェブスターの貢献が大きい。彼はスペリングを簡明にするとともに、単語の中の音節を明確に発音するという、発音原則の確立にも努めた。例えば、英国人が secretary を sikretry、certainly を sartinly、boiled を byled などと発音するのを、sec-ret-ary などとスペルどおりに正確に発音するように指導した。またスペリングに関していえば、英語の theatre、colour、labour、defence、tyre を、米語でそれぞれ theater、color、labor、defense、tire と綴るようにした (マクラム・クラン・マクニール共著『英語物語』による)。

アメリカ英語 (米語) におけるもう一つの工夫例は、二字熟語や合成語の多用である。英国英語が難解な語彙を多用するのに対して、米国英語は平易な熟語を多用する。これは米系投資銀行の国際ビジネス拡大のおかげでもある。例えば人事 (personnel) を人的資源 (human resource) といい、債券 (bond) を確定利付き (fixed income)、不動産 (property) を実物資産 (real estate) といった具合である。そのほかにもクレジットカード (credit card)、資産管理 (asset management)、百貨店 (department store)、工夫 (know how)、経営大学院 (business school)、映画館 (movie theater) といった合成語を駆使してきた。

近年米国英語をさらに進化させ、それを自己流の新しい言葉として世界的に普及させたのが米系投資銀行であり、英語は投資銀行の国際ビジネス戦略の一環ともなっている。

(以下は次号に続く)

わたべりょう (法政大学 経済学部教授)